

(続 端無常三郎、森口鶴松。〈 〉内は筆者補入。句読点筆者) 此天理王命様のしんへハ、これまでのしんじんとハちがいませす。をかみきとをすするでわありません。をはなし一上もをして、をはなしをよくきいて、そのりをしやんして、これまでしてきた事と、をはなしと、てりあわして、ちがう処をさんげわびをして、心あらためて、ごりやくをいたゞくのであります。この天理王命様と申すハ、月日様をはじめ、いざなぎ、いざなみのみこと様まで、十はしらの神」(65ウ)

様のごそめい〈ご総名〉にて、天理王命様ハ、ないにんげんないせかいを、をんこしらゑくだされました、此よのをや様やと、きかせられます、天理王命様のをはなしにハ、にんげんハあざないもので、なにもしらずに、にちへハ、わがからだわ、わがもの。ね〈寝〉ようと、をき〈起〉よをと、心のまゝになるものや、とをもふて、かてきまゝ〈勝手気儘〉をゆふているなれど、わがからだわ、わがまゝになるならば、やまいでなんぎするものハないバツの事」(66オ)

それわがみ、わがじうよにならぬゆへに、ねよをもてもねられやせん。をきよふとをもても、をきられず、きくことも、みることも、たべることもできんよふになる。これをじいぶん〈自分〉のちからで、なをす事ハできまい。そこで、この天理をのみことさまの、をはなしにハ、人間のからだわ、かみのかしものと、きかせられまして、だいち〈第一〉、めゑどうよりハしめて、たすけるとの事なれば、たいそふわたいそ」(66ウ)

だけ、いささかわ、いささかだけのあたゑとて、きんぎんづくでハなし。まことの心一ツなり。たいそふわたいそふだけ、じふんしんしんせにや、ごりやくわありません。ごりやくのあるも、ごりやくのなきも、めゑへ心のしだい、しんじんしだいである、とのをはなしであります。又十五才したの子どもなやみハ、ふたをやの心ろゑちがいが、あらわれたとの事ゆふへ、ふたを」(67オ)

やの心をよくなをすべし。かみさまのをはなしに、みのうちいたみなやみハ、かみさまのごいけんと、きかせられます。やまいわ、いしやにかゝり、くすりをむべし。この御みちハ、けつしていしやくすりを、とめるでわない。くすりハやまいをなをすためなり。もとへくすりとても、かみさまの、をんこしらゑくだされたるものなれば、かみさまのをかけて、きくものなり。」(67ウ)

それゆふへに、たとへ、くすりハのむとても、しんじんとゆふものハ、せにやならん。また、くすりのき〈か〉ぬものハ、なをさら、じいぶんで、しんじんせにやならんよつて、くすりハかならずのみ、そのなかで、をはなしをよくきて〈聞いて〉、ごいけんとゆふ事を、よくしやんして、心をあらため、かみさまゑねがゑば、どんなむつかしいやまいでも、これたすけんとハゆふわん。むつかしいとゆわん。心ろしだいと」(68オ)

きかせられます。よつて、心のかいりよを〈改良〉ハかんじんであります。つねひごろ、とり〈通り〉くらす、そのうちに、ほしいとをもう心より、をしむがでる。かわいより人をにくむ、はらがたつから、人をうらむ、さきのがわからんから、よくをむさぼり、又、みをたカぶりなどもする。ゆふゑに、人をみ

くだすとゆふハ、あさましき事にて、そのあしき心が、みにみに」(68ウ)

むくい、いたみなやみとなるゆふへに、そのなやむところで、しやんせよ。めがいたければ、人のめをいためやせんか。あたまがいたければ、人にこふまんせやせんか。はらがいたければ、人のほらいためやせんか、人にはらたてやせんか。あしがいたければ、ひとをふみつけにせやせんかと、一々そのなやむところについて、しやんせよ。じぶ」(69オ)

んが、ひとにした事が、みなわがみにあらわれると、きかせられます。まいたるたねなら、はゑてこにやならん。あしきたねまきする、そのあしき心がみにむくい、やまいとなり、さいなんとなり、みをくるしめ、いのちをちゞむ。これかみのいましめ。よくへカみさまゑ、をわびして、心のかいりよふせにやならん。人にな」(69ウ)

さけもせにやならん。たてやいたすけやいも、せんにやならん。むつまじくも、くらさにやならん。きれるものなら、つなぎてやり、こけるものなら、をこしてやるよふ、このよをわたるが、きよふのたい〈兄弟〉のゑん」(70オ)

以下、70ウ～78オまでは、空白、メモなどであり省略。

こううしすめてきをいさめて、しん実さため、きをしずめ、せんあくさだめ、内外の中、前正よりハ世界のいましめさとすきて、天理トハ親である、親といふハ天の月日やて、それわが子の事をもて見よ、皆へたてハできまいがな。まことの心こゝにあるぞや。心の内の中」(78ウ)

になるぞや。まこといふハ天理やで、まことあれハまことあり。まこといふハちがい、八ツのほこりやて、このほこり、ほしいや、をしやかわいへ、にくいうらみ、はらだち、よくとこふまん、このこのほこり、すみやかハるた事ならハ、神が入こんで、しいこうするぞや。人間の身の内」(79オ)

ハ神のやしろのたてながし。時々ハ、そふじするぞや。このそふじ、にくてするとハをもふなよ。かわいへでそふじするぞや。人間、又住家い、それ社トして立てあふろう。この間もハヤへそふじせねバなるまい。それぞれ神も入込」(79ウ)

そふし、ほこりつもるてあろふ、それ神も入込、そふじせねハなるまい。それ生子のこうになりた事ならハ、なにもくらきハ、さらにあるまいそをや」(80オ)

あと、明治25年1月20日のおさしづ写しのようなものがあるが、おさしづ書に記載なし。以下略。(端無常三郎 終)

次に紹介するのは、森口鶴松のみかぐらうたの解釈本である。明治期のみかぐらうた解釈本については、すでに『天理教教理の伝播とその様態』(おやさと研究所刊)の中で紹介論じているが、この本については、その中で触れていない。それは解釈というよりも、お歌にかかわつての、自らの悟りを記したものという感が強かったからである。しかし、みかぐらうたに触発されたかたちでの、悟りという点のみをみていくとき興味が惹かれるので、紹介しておきたい。なお、これは、四下り目五ツまでしか記されていない。

森口鶴松は、長柄分教会（天理市長柄町、城法大）の初代会長であり、城法支教会設置当時の会計兼派出掛。信仰は母親が熱心しており、お屋敷へは母親に連れられて参拝している。父森口又四郎も熱心で、同家へ山澤為造がおてふりを教えに行っている。明治16年、鶴松30才のとき、背中にヨウができ、おやさまより直々におたすけを頂いた。母セキはおやさまから「マアおせきさん、よう参つたな、三十六ヶ所の打分場所の紋、今拵へた。皆に一つ宛やつたが(まだ一つある)これお前にやろ」と仰って、一つ頂いて帰った、という。

表題は「神道天理 御樂歌理乃嘯本 奈良県磯城郡川東村大字海知 森口鶴松」と記される。「御樂歌」は御神樂歌の意であろう。「神」がぬけていると思われる。筆写年代は明確ではないが、明治期と思われる。というのは、鶴松は明治29年に長柄村で名称を頂いている。しばらく海知から長柄へ通ったという話が残されているものの、海知在住時代のものということから、明治のものとは推定できる。なお前文から見ると、教会設置以後のものではないかとも考えられる。なお鶴松は、こぶき話（和歌体14年本、説話体16年本）や「おふでさき」の写本を残している。

人道天理拾貳下りの理嘯

皆様、此天理王ノ命様の、を勤めを毎月致し被成ル此拾貳下の理の嘯を、私がさせてもらいます。

壺下り目

一ツ正月こゑのさづけわやれめづらしや

と申ますハ、月の初め正月ハ月の初め、日の初め元日。年の初めわ元年。人間の初めハ一才、一才なれば、我が年の初めで御座ります。人間が母親のくらはらの中ヨリ、拾月達て、此世の」(1ウ)

あかき処ゑ出るから、人間のちいさいをりハ、あか子とゆうので御座りましよ。それで子どもハどくなしとゆうで御座ります。其どくなしの小共にも、親があしき事の道を通り、小共にあしき事の道を教ふるから、子が悪しきな事をするので御座ります。又、親がよき道を通りて、小共に善き道を教ふるば、子が善き事をするので御座ります。毒なしの小共にも、善ト悪ト二ツの道を教ふるのわ、皆親から教ふるので御座ります。其毒のない、西も東もしらぬ小共に、学校の教しが」(1ウ)

西も東も教て申で、しかたをいたし、口でゆうて西も東も教ふるので御座ります。段々勉強するほど、それへの学もんを教しが、教ふるので御座ります。其西も東もしらぬ小共に、それぞれの学もんを教ふるなれば、よく教くならうのがめづらしかろうがなと、此神様が申なさるので御座ります。此拾柱の神様が付いているから、教うのであると、申なさるので御座ります。此理をもつて、一ツ正月こゑのさづけハやれめづらしや、と申ので御座ります。」(2ウ)

二いににこりさづけもろたらやれたのもしや

と申ますわ、西も東も、何もしらぬ小共を、学こうゑやりて、教しに学問ををしゑてもらい、西も東も知るようになりたなら、

人がきて、其小共に、其人が西も東もたづねたなれば、小共が西わあちい、東があちいとゆうて、いび〈指〉をさしたなれば、人がゆうのにな、あなたわ、とこの子ともしうで御座りますな。としもいかんのに、西も東もいろへの事をしりて御座る、かしこい子で御座りますなと、人がゆうたなれば」(2ウ)

我が子の事ハ、心でうれしい御座りますやろがな。人が子共に、にいこりハラうよをな、かをして、西も東もたづねたなれば、子共が西も東もいびさしをすれば、かしこき親とゆうて、さづけをするので御座ります。又、わが子の事をたのしんで、せいだ〈い〉するので御座ります。此理を以て、二いににこりさづけもろたらやれたのもしや、と申すので御座ります。

三にざんさい心をさだめ

と申ますわ、我が子があしき心にならず、我がかきよ〈家業〉を勉強して」(3ウ)

人にわゑんりよをして、親のひきようを取らんようにしている子なれば、親わ子の事く〈苦〉にするとゆう事ハ御座りません。又、悪しき心を持ち、かぎよも勉強せず、人にでさばりてゆうような子なれば、私どこのやつわもう悪しきな処ゑ、きざしやがりて、なまくらになり、親に心配斗り掛けて斗りいよると申ますので、御座ります。又、悪しき心を持たず、かぎよ勉強して、人にわゑんりよして、親にしりのこんようにする心の子でありました」(3ウ)

なれば、何と申なさるど。私しとこのやつわ、しんびよにはたらいてくれる、むゑきな金もつかいませんし、子の事わ何も思う事ハ御座りません。さすれば、心痛も労力もする事わ御座りません。いつまでも、さんざいするよな心になりて、きのうくよな心さざめて、内々なかよう、むつまじう暮さるので御座ります。此理を以て、三にざんさい心を定め、と申すので御座ります。

四ツよの中

と申ますわ、悪しき心を」(4ウ)

もたず、我が子の事もくにもせず、をもしろをかし、内々中能く暮しているのが、世の中とゆうので御座ります。なで〈何故〉よの中と申ましたなれば、をもしろをかしいくらすに付て、内々むつまじういる二、内二てなにすれど、心に思っている通りにゆくのが、四ツよの中、と申すので御座ります。

五ツりをふく

と申ますわ、誠心をもつて内々なかようして、たてやい助け」(4ウ)

やい、悪しき心をもたずして、くらしていたなれば、天理に出来ない、天より幸福をうけるので御座ります。幸福と申ますわ人間のからだを、此拾柱の神様が拾分ごしうごう被下る。拾分御しうごう被下で、人間のからだわ、じうようじだいにうごかる。じうようじだいに、うごかるに付て、仕事がおもうようにできる。思うようにできるに付て、何事もすれど、心に思っている通りにゆくのが、天より我が身に」(5ウ)

理をうけるので御座ります。此理を以て、五ツ理をふくと申すので御座ります。